窪川句会（十月七日）

去る人が遠くなりゆく秋思かな　田中　一柿
白樺にからみて燃ゆる蔦紅葉　野坂　安意
木犀の大樹一村香に包み　市川　令子
しば漬も晩秋の膳に色を添へ　棚野　照
一杓の手水にみそぐ秋風裡　池　和子
黄葉を一葉落して庭雀　渡辺　小梅
花すすき点りはじめし山家の灯　戸田美知子
冬ざれや峡ゆくバスに客一人　西森千代樹
新会員（オイコニア）
中庭の木の実を食べに小鳥来る　武井　恭子
稲刈りの香り吸い込む散歩道　岩崎　良子
散歩する水が冷え込む歩道かな　谷脇　彬甲

上山（大正）句会（十月）

山間の没り日すとんと神の留守　中平ひろ武
ふつふつとふく新米の香りかな　井野谷北斗
秋桜一本の道葬のゆく　中平　幸恵
神渡り靖国と云う神ありて　徳広せいお
意地張ってもの云わぬ日のうろこ雲　森本　千富
独り言だんだん遠く秋日和　中森　鶴子
いつまでも心に残る名月よ　田辺　富子
雁渡る泣くまいとして靄の道　伊与木秀子
秋草に昔の足を濡らしけり　曽根　克平

窪川短歌会（八月二十四日）

オクラ摘む我の後追う三歳の孫の帽子に蝶のまつわる　北村　幸子
風渡る与津地の里のまだ青き稲田の上をアキアカネ飛ぶ　嶋岡　蕗子
その一羽一羽に永久に戦なき世を祈りつつ千羽鶴折る　上岡　富子
四万十の青き流れに飛沫あげ泳ぎし辺り車窓より見ゆ　笹岡　誠子
少年は水牛マスクを脱ぎて立つためらいもなき若さに充ちて　市川　隆子
ひとり居の静けき無聊目の前の香水の色揺らしてみたり　市川　浩子
今に悔ゆ病む妹の枕辺のりんごを取りて食べし遠き日　井上　典子
子を抱きて焼夷弾降る御堂筋叔母は逃げにき終戦の夏　嶋岡　紀美
涼みつつ縁より仰ぐ夕ぞらの櫛の梢ユウガオの咲く　藤田　恕子

短歌

固き土押し上げ萌え出る草の芽のどこに秘めおるその生きる力を　伊勢脇　利勝

俳句

台地郷あらんかぎりの生姜かな　土居　徳一